末世から抜け出す『イノベーション』

昔から末世には、天災が増えるとされている。2011.3.11 東日本大震災以降を振り返ってみても、ゲリラ豪雨、台風、竜巻等が増え、約 20 件の激甚災害が起きている。最近も広島の土砂崩れ、御嶽山の爆発があった。

『新書で名著をモノにする－平家物語』[i]のカバーに「どう考えても、現代と言う末世は、幕末維新ではなく、『平家物語』の時代に似ている。朝礼暮改を繰り返す為政者たち(政府)、批判するだけで何もしない貴族たち(野党)、騒ぎ立てるだけで仕事をしない寺院勢力(学者、メディア)‥‥」とあり、「改革、改革と言いながら、委員会や外郭団体が増えるばかりで、いっこうに庶民の生活は楽にならない現代日本の『改革』とよく似ている。改革を唱えている人々は、しょせんは自分も既得権を握っている上の方の方々であり、他人の既得権にケチをつけても、自分のそれを手放すつもりはさらさらないように見える」とあった。

上記は国の話ですが、民間企業においても似たようなものでしょう。NBCI の会員企業を対象に行ったイノベーションに関するアンケートでも、何故、我が国でイノベーションが起こりにくいのかと言う問いに対して、経営陣や管理職がリスクを回避する傾向が強いとする回答が幾つかあった。リスクのないイノベーションは考えられず、リスクの少ない研究開発は改善、改良に終始することになると考えられる。社外と取り組むオープンイノベーションはリスクが大きくなるので、なかなか進まないのもなるほどと納得できる。

その様な事を考えている折、9 月 25 日川崎市ナノ・マイクロ技術支援講座におけるクラスターテクノロジー株式会社　安達　稔社長[ii]の講演を拝聴する機会に恵まれた。

安達社長によれば、イノベーションとは「次世代を担う若い人たちに夢と希望」であり、イノベーションを実現するのが「社会的貢献と役割を担う存在価値ある企業」とのことであった。同社経営の理念は「企業は目先の利益を考えず、社会に貢献する。役員・社員の一人一人の使命感が役割ある行動を生み出し、組織・社会を変える」である。オープンイノベーションは、企業単独では限界があり、「異分野の産業技術融合からイノベーションを生み出す。現在の産業分類に無い新産業創出から世界に貢献する」ために行う活動と定義づけておられた。

青くさく聞こえる「夢」と「希望」、これが末世に喘ぐ企業に欠けている、だから、イノベーションが創出できない。目先の利益、金儲けを目指した研究開発は決してイノベーションに結びつかない。夢、希望の実現、国民の利益、人類の繁栄に貢献することを目標に据えなければならないと認識を新たにした次第。イノベーション創出を目指すものは、短期ではなく長期的視野に立って、利己ではなく利他、部分最適ではなく全体最適を考えなくてはならない。地に足をつけ、より大きな夢や希望の実現を目指し、突き進むうちに、小さなイノベーションが融合され、国内産業創生へ展開する。そんな風に考えさせられた安達社長の講演だった。

---

[i] 出典：長山靖生『新書で名著をモノにする－平家物語』光文社新書

[ii] クラスターテクノロジー㈱の安達稔社長には NBCI の副会長に就任いただいています。